

『日華文化交流史』に見る元・明・清と日本との交易について

——『日華文化交流史』とその時代（二）——

About Trade Between Japan and the Yuan, Ming, Qing Dynasties in

the History of Japan-Sino Cultural Exchange (『日華文化交流史』)

木宮 敬信

Takanobu KIMIYA

(令和元年十一月七日受理)

抄 録

本論は常葉学園創立者であり、歴史学者である木宮泰彦の主要著書である「日華文化交流史」の第四編に注目し、当時の日中交易の概要についてまとめながら、木宮の考えを推察するものである。「日華文化交流史」では、禅僧を中心とした日中交易は、その時代における政治的思惑と経済的利益の中で、盛衰を繰り返しながら行われてきたこと、また、大陸からの様々な文化の移植に禅僧が大きな役割を果たしてきたことを詳細な史実をもとに解説している。また、本著からは、木宮の正当性へのこだわりや、困難に対して粘り強く挑戦する姿勢、日中関係を中心とした平和への思いを感じることが出来る。これは、常葉学園の建学の精神に通じるものであり、現在の在学生等の関係者にも是非理解して頂きたい内容である。

キーワード…日華文化交流史、木宮泰彦、日元交易、日明交易、常葉学園

一、はじめに

筆者は、二〇一八年度より「学内共同研究…『日華文化交流史』とその時代（代表・若松大祐）」に参加し、木宮泰彦の主要著書である「日華文化交流史」の輪読を行ってきた。本研究の全体目的は、学校法人常葉学園（現・学校法人常葉大学）の創立者である木宮泰彦の歴史学者としての業績を再確認すること、また、授業等を通じて彼の業績を学生を含む関係者に分かりやすく紹介すること、建学の精神の理解を深め、学園への帰属意識を高めることである。筆者自身は、木宮泰彦の生家である浜松市にある臨濟宗妙心寺派龍雲寺を継いだ長女初野の孫にあたり、木宮家のルーツである龍雲寺の跡取り（長男）として若年期を過ごしてきた。一方、初野の婿となる乾峰は、文部事務官として初代学習指導要領の作成に関わり、中央大学教授等を経て、龍雲寺の住職を兼務しながら常葉学園に奉職し、短期大学学長などを務めた。また、父親の一邦も、地質学者として静岡大学教授を経て、龍雲寺の住職を兼務しながら常葉学園に奉職し、浜松大学長や副理事長などを務めた。このように、筆者の家系は、常葉学園創設以来、学園と龍雲寺を兼務する生活を送ってきた。現在の龍雲寺は、筆者の弟が専従の住職となり、筆者自身は先代副住職として龍雲寺に関わりながら、常葉大学教育学部教授を務めている。このように教育者、宗教者としての両側面を持っているのが木宮泰彦に通じる共通点である。本研究分野は、筆者の専門外であり、研究対象として十分な考察を加えることはできない。しかし、木宮泰彦の思想の根底には龍雲寺での小僧生活があるのは明らかであり、

彼と同じ禅宗の小僧としての生活を送ってきた身として、研究者とは別の視点での考察ができるのではないかと考えている。

二、研究目的

本論では、木宮泰彦の主要著書である「日華文化交流史」の中から、第四編第三章以降の元・明・清と日本との交易について焦点を当て、木宮の関心の中心や中国および幕府や朝廷に対する考えを明らかにしていきたいと考えている。特に、日本や中国の禅僧の交流とそれに伴う文化に与えた影響について、木宮の考えをまとめてみたい。

この時代に禅僧の果たした役割は、高井が中国帰化禅僧の学識について指摘しているように、宗教だけでなく文学や芸術分野に至るまで非常に大きいものがあった。禅的な思考を持ち合わせた木宮が、これらをどのように評価するのかについても読み解いてみたいと考えている。そして、「日華文化交流史」から読み解いた木宮の考えを、常葉大学の学生にどのように伝えるかについても考察を加えてみたいと考えている。

三、各章における記載内容と読後感

三一、第四編第三章「元との貿易」、第四編第四章「帰化元僧と文化の移植」

本章では、日本と元との貿易について、商船を中心とした往来の詳細についてまとめている。当時の日本と元との関係は、二度の元寇の影響から政治的に強い緊張状態にあって、低調だとされていた。しかし、本章の詳細な記述から政治的な対立とは別に、

経済的・文化的な交流が盛んになっていく様子がうかがえる。商船のほとんどが私的な日本船だとされ、他の時代と比較しても最も往来が多かった時代とも考えられる。木宮は、「元寇の失敗により、日本を征服することの困難さを知り、平和的な手段をもって征服しようとした（四一六頁）」ことが、私的商船の興隆の要因としたが、この解釈はフビライが三度目の日本遠征を計画していた事実と照らし合わせると根拠に乏しいと言わざるを得ない。

この時代、天龍寺船をはじめとした公的な商船もあった。天龍寺船が鎌倉幕府の許可を得て交流を行っていた背景には、僧侶が便乗していたことが関係している。幕府が安全を保障し、商船がその見返りとして経費を支払うこととした。この僧侶の交流については、第四章に元僧の来化として詳細にまとめられている。日元間の交流が盛んになるにつれ、元僧の来日も増えていく。元僧は、元朝の名により来日し留まったケースと、日本からの招待で来日したケースがあり、日本における文化の促進に大きく貢献したとされている。一覧表に列挙された著名な十三名の元僧のほかにも多くの元僧が来日したとされる（四三四頁）。

なお、ここで列挙された元僧は全て禅宗の僧侶であり、他の宗派の僧侶の記載はない。実際に元僧は全て禅宗僧侶であったのか、それとも木宮の出自から禅宗を取り上げて記載しているのかについては不明である。

二度の元寇に失敗したフビライが、日本の上下が深く禅宗に帰依しているということを利用し、禅僧を日本に遣わし日本を論ぜうとしたとの内容が記載されている（四一六頁）。政治的緊張の中に、元僧を中心とした交流が盛んに行われていたことは、元の

思惑の中にあつたとも考えることができるだろう。このように元僧の来日には様々な意図があつたと思われるが、彼らによって日本文化が大きな影響を受けたことは紛れもない事実である。

元僧のパイオニア的存在となつた一山一寧が日本に与えた影響により、中国留学が盛んになった。当時の禅宗は京都の公家には受け入れておらず、鎌倉を中心とした武家禅であつた。しかし、一寧が鎌倉から京都の南禅寺に移つたことを考えると、禅宗の中心が鎌倉から京都の公家禅に移りつつある様子がうかがえる（四三五頁）。元の高僧であつた清拙正澄は、北條高時の招きによって来朝した。朝廷や幕府のみならず、多くの武士の精神生活に影響を与えた。また、五山文学にも貢献した。その他、禅宗寺院の規則を整備したことも重要な功績であろう。清拙正澄の来日より三年後、梵俊と梵仙の兩名は、日元間の交流が盛んになった時期に来日している。多くの公家や武士に教えを説いたほか、多くの詩文集を残し、日本における中国文学の発展に寄与した。

本章の読後感は以下のとおりである。私的な日元貿易の状況や元から来日した禅僧について詳細に記述されている。その時代背景からマイナー感のある日元貿易を詳細に記述することで、様々な思惑の下で活発に交流が行われていた事実が明らかとなった。一方で、「その思惑が何か」についての詳細な考察は省かれており、歴史的な事実を記載するに留まっていることには物足りなさも感じる。

三一二、第四編第五章「入元僧と文化の移植」

入元僧とは帰化元僧と異なり、日本から元に渡航した僧侶であ

る。本章では、元に渡航した僧侶が一覧表にまとめられている。様々な文献をもとに、渡航年、在留年数、主な業績などについて詳細に記述している。この一覧表からも、大麥多くの僧侶が入元していたことがわかる。しかしながら、木宮は人数は多いもの志の高い僧は多くはなかったとし、入元そのものが流行化していたことを指摘している（四六六頁）。また、入宋僧に比べて、入元僧の影響力が小さいことも触れられているが、これはそもそも元僧の力（元僧）の力が落ちていくからであるとしている。それにも関わらず、入元僧が多くいるのは、観光的漫遊的であったからと指摘した（四九八頁）。ただし、仏教以外の文化の移植（漢文学、儒学、史学、書道、茶道など）については、こうした入元僧が多くいたことがプラスに働いたと考えている。これは、現代における一時の学生の留学ブームと非常に似た構造であると感じられた。当初の留学生は純粹に学問追及を目的としていたが、徐々に留学ブームが起り、観光の延長線上の留学や何となく箔を付けるためだけの留学などが増えていった。ただし、こうした留学生が欧米文化を日本に持ち込み、新たなブームを作り出してきたことも事実であり、日元交流と同じ構造が見て取れる。

本章の読後感は以下のとおりである。入元僧の状況と併せて、本編では大蔵経（一切経）の開版について詳細に記述されている。宋代以降、写本から刊本へと移行し、多くの大蔵経が作られているが、一般に日本国内で開版できるようになったのは江戸時代以降と言われているので、当時、元から持ち込まれた様々な大蔵経は大麥貴重なものであっただろう。また、この大蔵経の開版の試みはこれまでも何度も行われてきたことや、これが開版の技術向

上そのものに貢献したことも記述されており（四七六頁―四八〇頁）、前述した入元僧が文化移植に貢献したことと併せて興味深い内容である。大蔵経は仏教聖典の総集であり、この開版について詳細に述べられているのは、木宮の仏教への関心の高さをうかがわせるものではないだろうか。

三―三、第五編第一章「足利幕府と明との通交貿易（其一）」

本編では、足利幕府（室町幕府）と明との勘合貿易までの顛末と、その後一四一九年まで続いた「第一期」勘合貿易について記述している。日本と明とが交易する理由は、日本は経済的利益を獲得するためであり、明は倭寇を取り締まってもらうためとされる（五二九頁）。当初の日本の窓口は九州の征西府であった。この当時は、やり取りはあったものの互いに譲ることがなく交易は十分に進まなかった。両国のやり取りについては、以下のようにまとめられている（五二三頁―五二八頁）。

一三六八年元から明になり、日本に交易を求めてきたが、明国のことを十分に理解できていない日本が拒む。

一三六九年に再び明は七人の使いを出し交易を求めたが、威圧的な文書であったため、日本が五人を殺害、二人を拘留した。なお、当時、倭寇が中国に侵攻し続けており、明にとっての大問題であった。

一三七〇年、再度十五名の使者が来る。親王が使者を殺そうとしたが遺留された。徐々に明国の状況が明らかになったので、一三七一年日本から明に使者を出した。同時に、倭寇が拉致した明人七十人を返還している。明国も徐々に日本の状況（天皇などの

権力構造) について理解し、倭寇禁止や交易を求めて使者を遣わせた。

一三七三年、京都で足利幕府と明との初めての交渉が行われたが、その内容はわからない。その後、相互のやり取りは続くが、互いに譲らない外交の駆け引きが続く。これらの日本の窓口は主に九州の征西府であった。

しかし、足利義満が明国との交易による利益を知り、財政難であった幕府が交易の交渉先となると積極的に交流が行われるようになる。勘合府を使用し、貿易船と倭寇船を区別する方式は、外交上の儀礼によって行われた一種の官貿易とみられることもできるだろう。なお、後に足利義持が国交を絶ち、「第一期」勘合貿易が終了すると、再び倭寇の勢いが増すこととなる。

本章の読後感には以下のとおりである。本章では、木宮の皇族崇拜姿勢が際立っている。特に、明に対して常に敵対的態度で接した懐良親王を称賛する(五二七頁)一方で、足利義満が「日本国王源道義」との明からの呼称と正朔の賜与を甘んじて受けたことを「我が外交上未だ曾て見ざる汚点」と断じている(五三一頁)。義満と明との外交については、建文帝と永楽帝宛ての二種類の国書を用意する駆け引きなど、スリリングで非常に高度な外交を展開していたと評されることもあるが、木宮は、冊封体制を維持しプライドを捨てて実利を取った義満の姿勢について批判していると考えられる。

三―四、第四編第二章「足利幕府と明との通交貿易(其二)」

本章では足利義持が終わらせた「第一期」勘合貿易の後、一四

三二年に足利義政によって復活した「第二期」勘合貿易について概説している。この「第二期」勘合貿易は一五四七年まで続いたとされるが、幕府主導であった「第一期」に比べて、「第二期」は勘合を巡る国内の勢力争いが起こる等、幕府のコントロールが効いていない様子もうかがえる(五五四頁―五五九頁)。

足利義政が一時途絶えていた勘合貿易を復活させた理由は、明が日本が朝貢しないことを遺憾としたからである。義政が使者を送ると大いに喜び、この正史である道淵を明帝が天龍寺に住持させる勅諭を出した。これについて木宮は、「道淵がもと明人であったとはいへ、明帝が彼を以て我が官寺である天龍寺に住持させるといふのは、甚だ奇怪なことである。」としている(五四九頁)。義満時代よりも儀式は簡略化されたが、日明が交易をすることで倭寇の侵略を防ぐ目的は依然として大きかった。しかし、瀬戸内海と九州沿岸は海賊の巢窟であり、遣明貿易が倭寇に襲われる事実が記載されている。倭寇を抑えるために始まった遣明貿易が倭寇に襲われることになり、幕府の関与が十分でないことが示唆される(五七九頁)。

また、勘合貿易は、勘合を持っている船が交易できる仕組みであるため、交易の前に勘合を誰が獲得するのかという問題が発生していた。国内競争、衝突は激化し、国内の有力守護大名である大内氏と細川氏が一五二三年に寧波で衝突(寧波の乱)し一時交易が中断されることとなった。なお、古い弘治勘合は細川氏、新しい正徳勘合は大内氏が持っていたことが、両氏の権力闘争を煽る原因となった(五六三頁―五六七頁)。

貿易品については詳細が記載されているが、日本から明への献

上品以上に、明から日本への返礼品の方が多く、より多くの返礼品を日本が求める様子もうかがえる。この点からも細川氏と大内氏が権利を奪い合うほど勘合貿易は経済上の利益があったと考えられる。ただし、両国の力関係は微妙で、日本から明国を威嚇したり、返礼品を迫ったりしている記載もあり、外交上の駆け引きが行われていたと考えることもできるだろう（五九〇頁）。

また、宣徳条約で定められた事項（遣明は十年に一回、一回三百人、三隻、刀剣積載量三百）は、十年一回以外は、ほとんど守られなかった。そして、次第に従商人（客人衆）の同乗が増加し、民間による交易が中心になっていく。十年に一回とされたのは、日本の事情として準備に時間がかかる（勘合府獲得に加えて、貿易品の調達といった金銭的問題）こともあったが、明の事情としては、倭寇緩和のためには有効であるが頻繁に遣明があると経費を要することが挙げられる（五六四頁）。

本章の読後感は以下のとおりである。木宮は、遣明表に対して否定的で、「体面を損ずることの甚だしいもの」と表現している（五六〇頁）。これは、義満の姿勢を批判し、義政がこれまでの冊封体制を絶つ目的で「第一期」勘合貿易を終わらせたことを称賛した姿勢と共通している。また、「第二期」においても変わらぬ冊封体制の中で、義政が様々な抵抗を示し日本の尊厳を保とうとしていたことについて評価しているのではないだろうか。明国に対する日本の姿勢に対する評価は、前章での書きぶりと併せて一貫している。

三一五、第四編第三章「入明僧・来朝明人と文化の移植」第四章

「明末に於ける日華の通交」

第三章は、日本から明を訪れた入明僧について、その目的を明らかにするとともに個々の一覧を詳細にまとめている。一方、明から日本を訪れた来朝明僧については、高僧が少なく「もと明人」「帰化僧」などと呼ばれていたこと等、簡単に記載されている。木宮は、入明僧の一覧について、五山文学の開拓者である上村観光氏が作成したものと比べ、はるかに正確であると自ら評価している（六〇二頁）。

求法僧と呼ばれた入明僧は、勘合貿易以前に商船に身を託してそれぞれで入明した僧であり、入元僧と異なり純粹に禅法を求めたのではなく、叢林生活を経験し中国の文化に触れる（詩文を作る）ことが目的であった。禅僧としての本道とは言えないものの、明からの文化の移入には彼らの存在が大きく貢献した（六一四頁）。

求法僧と異なり使命を持って入明した僧は、勘合貿易以前は征西府から、それ以降は幕府から派遣された。永楽条約を境に、前述の求法僧は途絶え、使僧が中心となった。彼らは使僧ではあったものの、詩文、学芸に秀でた者が多く、滞在期間も求法僧に比べ長くはないが、明で評価された僧も多くいる。入明僧の多くは、江南の五山十刹などの名庭や南京や北京といった都を訪問していた。寧波からの道のりは相当遠いが、その道中で寺院や名刹に立ち寄っている。訪問期間が短く忙しい日程ではあったが、多くを学び日本に文化を移入していた様子もうかがえる。彼らの持ち帰った物のほとんどが書籍であったことも、その文化的貢献を物語っている。木宮は「五山文学が平安期の帰属によって作られた

漢文学や徳川の儒者によって成された漢文学と異り、全然倭臭を脱した生粋の漢文学であったといふことも偶然ではない。」と中国人らしい詩文を作れたこの時代の入明僧を高く評価している(六二四頁)。

第四章は、日華間の交易を戦国時代の九州諸侯と明との通交、江戸初期の徳川家康による日明貿易復活への動きを論じている。日明間の交易の経路には、対馬―朝鮮という経路と、薩摩―琉球という二経路があった。「第二期」勘合貿易の時代に南海路が生まれてから、薩摩が交易の重要拠点になったと指摘している(六一頁―六三五頁)。日明の貿易は、勘合貿易以外を禁止していたにも関わらず、この約束は必ずしも守られておらず、薩摩、豊後、平戸には明船がよく来航していた様子が記述されている(六二七頁)。

本章の読後感は以下のとおりである。封明貿易の復活の際に、薩摩が人質の受け取り役をきっかけに独自の交易の約束を交わし、明船が堺の商人伊丹屋によって襲撃される事件もあいつつ、琉球王国を使った中継貿易が行われていくことになる。木宮は、「薩摩が琉球を介して間接的に明と交易したことは看過し難い。」と述べている(六三五頁)。正当的でない行為に対する木宮の強い感情が読み取れる部分である。また、木宮は、五山文学による漢文学は、平安貴族や徳川の儒者が作った漢文学とは異なり、生粋の漢文学であると中国人らしい詩文を作れた入明僧を高く評価していた。中国文化に対する畏敬の念が感じられる記述であり、これまでの木宮の皇国史観とは異なっている。

三一六、第四編第五章「清との貿易」

本章は日清貿易、特に鎖国時代に日本唯一の外交貿易港であった「長崎」での貿易の様子を概説している。鎖国時代であったことから日本から清へ渡った人土についての記述はない。一方、長崎での貿易については、長崎における貿易機構や人的組織や清の商人をどのように滞在させたのか等、詳細な記述がなされている。年々多くの清船が来航し多種多様な物品を売買するため、日本の金銀銅の流出が著しくなり、そのため年間の来航船数を制限したり(六六〇頁)、「信牌」を発行して、それを持たない船の入港を禁じたりしていた。しかし、現実には密貿易が多く行われていた。抜刀が禁じられていたことから強く取り締まることもできなかったようである(六六四頁)。

なお、劉(一九九八)は、「信牌」は朝貢国に与えられるもので、日本が清に交付するのは力関係が逆であるとの抗議が清国内でおこった信牌事件について、「信牌は国家間の外交文書ではなく、単なる商人の交易上の印版である、つまり、少しも国典にかかわる大事ではない。」との清国の立場を説明している。また、「清代初期になっても日本は最も警戒すべき国とされていたにもかかわらず、康熙二十三年に海禁令を撤回した後、中国の商船が長崎に殺到したのは、利益を求めざるに、日本銅は中国にとつて非常に必要なものであったからである」とも記している³。こうした記述からは、この時代の日清の微妙な関係性が読み取れる。また、多くの中国書籍(唐書)が輸入され日本の学術全般を向上させた。また、物品や食品に加えて珍獣奇鳥なども輸入されていた。一方で、日本から輸出禁止品として、伝統的に目玉商品で

あった刀剣・硫黄が挙げられていた（六八九頁―六九四頁）。

その他、貿易税についても詳細な記述がある（六八〇頁―六八五頁）。従来は貿易において税を課すことはなかったにも関わらず、この時代には様々な貿易税を課すようになった。日本側の買手だけでなく清人からも様々な名目で多額の税を徴収していた。これによって、長崎に相当額の金品が収められていた様子がうかがえる。

また、清人を宿町に宿泊させる弊害として、清人が不作法で喧嘩、口論、町屋の妻娘と私通、密貿易を繰り返していたと記述されている（六七三頁―六七六頁）。

本章の読後感は以下のとおりである。長崎での貿易の様子が詳細に記されているのは、鎖国下に「特に許された貿易」であるがゆえに管理統制が厳しく行われ、その必要性から多くの行政文書が残されたことの反映であるかもしれない。

「信牌」の交付に関する清からの抗議について詳細に触れられてはいない。その他の記述から、本宮は清への朝貢へ批判的であったと推察されるため、両国の微妙な力関係に触れるこの件について意図的に記述しなかったとも考えられる。

長崎に相当額の貿易税が収められていた。これは貿易品の価格に上乘せされていたはずであり、清からの輸入品は相当の高級品と考えられる。

長崎における清人の振る舞いから、民間の清人は大変な悪党（荒くれ者）が来航していたのかとも推測できる。多くの清人が日本より清の方が立場が上であると考えていたのだろうか。また、清人の中で商人の立場はどのようなものであったのだろうか。

三一七、第四編第六章「来朝並びに帰化明清人と文化の移植」

本章では、日本に來た明清人が日本文化に与えた影響について記述している。來日した明清人とくに中国僧を一覧表でまとめているが、その人数が鎌倉足利時代より多くなっている。しかし、一七二六年に幕府が中国僧の招聘を停めることとなり、中国僧の來日はなくなった。この時代に來日した僧侶は、黄檗宗の禅僧が中心であった。中国式の読経、建築様式、文化様式を日本でも堅持した黄檗宗の僧侶が日本にもたらした影響は、建築、書画、印刷、医療、音楽、料理など多岐に渡る。また、黄檗宗の開祖である「隠元」が來日したことは、非常に大きな意味を持った。「隠元」がもたらした中国禅は既に大衆化した念仏禅であったため、日本における臨済宗や曹洞宗の禅とは異なっていた。そのため、日本人の精神性に与えた影響は少なかったものの、高僧中の高僧である「隠元」が來日したという事実は、日本の宗教界に大きなインパクトを与えたに違いない。

本章の読後感は以下のとおりである。明の滅亡と徳川幕府の黄檗宗の受容には関連性があるとされる。明は滅亡の際、徳川幕府に救済を求めているが軍事的救援は拒否された。しかし、鄭成功らの密貿易を黙認することで明を援助したともいわれ、その明の手引きによって黄檗宗の開祖である隠元が來日（戦火からの避難）した。黄檗宗が明の残僧の救済（亡命）先としての役割を果たしていた。⁴こうした説に対する本著での記述はなかった。

四、まとめ

「日華文化交流史」は、時代を限定せずに日本と中国との交流の歴史を詳細に調べまとめたものであり、歴史的価値が非常に高いといわれている。いくつか史実と異なる点が指摘されているものの、大局的にまとめた著作は他に例がなく、中国においても主要図書として位置づけられている。文中の端々に木宮の考えが見て取れることも特徴的である。本論の対象とした第四編以降においても、駆け引きを嫌い「正当さ」を重視していることや、皇国史観に基づき日本を中心とした立場を重視していることが感じられた。

また、「日華文化交流史」は「日支交通史」を改訂したものであるが、東京大空襲によって焼失した原稿を再度書き直し出版されたとされる。河村（一九九八）は、同じ著書を再び書き直す事に要する気力とエネルギーは膨大であり、木宮の強靱な精神力がうかがい知ることのできる事柄であると評している。また、この時代に戦局に不急の「日華文化交流史」に紙の配給が割当てられたことは、国家的評価を得ていたか察するに余りあるとしている。そして、序文に書かれた「東亜の中樞をなすものは日中兩國である。兩國の国交が調整され、善隣の友好が達成されない限り、東洋における永遠の平和は、到底期待し得られないであろう。」という理念が当局を動かしたものであろうと記している。⁵⁾

この木宮の強靱な精神力および平和への思いが、後に創立する「常葉学園（現常葉大学）」の建学の精神に反映されている。常葉学園の建学の精神は、「より高きを目指して Learning for Life」であり、「美しい心を持ち、より高い目標に向かってチャレ

ンジし、学び続ける姿勢こそ、常葉の精神」と説明されている。現状に満足することなく、常に向上心を持ってチャレンジする姿勢、これこそ「日華文化交流史」出版に向けた創立者木宮泰彦の精神に通じるものであろう。つまり、「日中友好を基軸とした平和志向」「チャレンジ精神を重視する姿勢」、この二点を在學生に伝えていくことが、常葉大学に求められるのであろう。しかしながら、現在のカリキュラムや大学による企画、研究活動にこうした姿勢が具現化されているとは言いがたい。閉塞感漂う社会の中で、創立者木宮の思いを具体的で分かりやすい形式で明示していくとこそ、この時代に求められているのではないだろうか。

引用文献

- 1 高井恭子「明末帰化中国僧の学識について」『印度學仏教學研究』四十九（一）、二五一頁―二五三頁、二〇〇〇
- 2 何忠礼「南宋時期における日中文化交流：禅僧交流を中心に」『岩手大学平泉文化研究センター年報』五、一〇五頁―一二四頁、二〇一七
- 3 劉序楓「清代前期の福建証人と長崎貿易」『九州大学東洋史論集』十六、一三三頁―一六一、一九八八
- 4 大庭脩「徳川吉宗と康熙帝」大修館書店、一九九八
- 5 河村孝照「木宮泰彦先生著『日華文化交流史』と陝西師範大学教授胡錫先生」『浜松大学国際経済論集』五（一）、一八五頁―一九六頁、一九九八

